

# 小学校英語教育の課題と展望

## PROFILE

〈監修〉

**影浦 攻** かげうら おさむ  
(鹿児島純心女子大学副学長・教授／宮崎大学名誉教授)

広島大学卒業。教諭(鹿児島中央高校、広島大学附属中・高校、鶴丸高校)の後、鹿児島県教育庁指導主事、文部省(当時)教科調査官、宮崎大学教授(その間、附属中学校長、附属小学校長を歴任)、鹿児島純心女子大学国際人間学部長を経て現職。

『小学生のえいご Book1～3』(啓林館)、『新しい時代の小学校英語指導の原則』(明治図書)、『改訂英語科新授業の実践モデル20』(明治図書)、『小学校教師の基本教室英語96選』(明治図書)、他多数。

〈連載第2回執筆〉

**兼重 昇** かねしげ のぼる  
(広島大学大学院教育学研究科・准教授)

1971年1月山口県生まれ。山口大学大学院修了、広島大学大学院単位取得退学後、兵庫教育大学助手、鳴門教育大学講師・准教授を経て現職。

「小学生の英語力に関する一考察：SOPA、ELLOPAを参考にしして」『小学校英語教育学会紀要』(小学校英語教育学会)、『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編 平成20年版』共編著(明治図書)、『小学校学習指導要領解説外国語活動編』作成協力者(文部科学省、東洋館出版社)、『小学校外国語活動研修ガイドブック』執筆編集協力(文部科学省監修、旺文社)など。

## ① はじめに

小学校英語教育の展望を考える際に、まず平成23年より5、6年生に導入された小学校外国語活動の成果と課題をしっかりと吟味する必要があるでしょう。本稿では外国語活動の振り返りをしたうえで、今後の小学校英語教育の在り方について提案をしてきます。

表1:児童の実態調査(文部科学省 2015より)

外国語活動の授業が好き、 どちらかといえば好き	72.3% (71.7%)
外国語活動の授業に進んで参加している、 どちらかといえば進んで参加している	71.4% (70.0%)
英語が好き、どちらかといえば好き	70.9% (70.7%)
英語が使えるようになりたい、 どちらかといえばなりたい	91.5% (91.5%)

( )内は、平成24年2月調査

## ② 小学校外国語活動の成果と課題

そもそも小学校外国語活動はうまくいったと言えるのでしょうか。文部科学省が実施した平成26年度小学校外国語活動実施状況調査では、小学校外国語活動の成果を次のようにまとめています(表1～3)。

表2:小学校外国語活動の成果:小学校教員の調査(文部科学省 2015より)

外国語活動実施前と比べて学級の児童に変容が みられたと回答した76.6%(76.5%)のうち 具体的な変化として	
外国語の音声に慣れ親しんだ	78.5% (77.6%)
外国語の基本的な表現に慣れ親しんだ	64.2% (63.9%)

( )内は、平成24年2月調査

表3:小学校外国語活動の成果:中学校教員の調査(文部科学省 2015より)

外国語活動導入前の1年生と比べて変容がみられたと回答した65.3% (77.8%)のうち具体的な変化として	
英語の音声に慣れ親しんでいる	93.5% (73.2%)
英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている	92.6% (72.9%)
英語で活動を行うことに慣れている	90.9% (71.8%)
英語に対する抵抗感が少ない	86.2% (68.2%)

( )内は、平成24年2月調査

小学校外国語活動の目標が、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」であることをみると、これまでの外国語活動は成果をあげていると評価できます。

一方、同調査やその後の文部科学省の報告では、小学校外国語活動の課題を次のように示しています。

「ALT等と打ち合わせや教材研究をする時間の確保」  
「外国語活動の指導力、指導力向上の研修機会不足」  
「外国語活動への取組みが充実してきたものの地域や学校、教員になどよりその取組みに差がある」  
「労務管理上ALTに任せてしまわざるを得ないという状況」  
「小学校高学年は、抽象的な思考力が高まる段階であるにもかかわらず、外国語活動の性質上、体系的な学習は行わないため、児童が学習内容に物足りなさを感じる状況」

また、中学1年生の約8割が小学校で「英単語・文を読むこと」「英単語・文を書くこと」をもっとしておきたかったと回答しているデータを引き合いにして、「中学校において音声から文字への移行が円滑に行われていな

い場合が見られる」という解釈を示しています。

この他にも日本英語検定協会(2015)では、小学校外国語活動の課題を次のようにまとめて報告しています。

表4:小学校外国語活動の問題・課題(日本英語検定協会 2015より)

課題の順	選択肢
1	教員(HRT等)の指導力・技術
2	指導内容・方法
3	ALTとの連携及び打ち合わせ時間
4	評価内容・方法
5	教員研修(質、回数等)
6	教材・教具
7	教員間意識の違い
8	指導計画
9	中学校との連携
10	設備の改善・維持
11	その他

これらをまとめると、小学校外国語活動の課題は、「教員の質にかかわること」「環境・設備、教材・教具及び指導方法・内容にかかわること」「評価にかかわること」「小中連携にかかわること」の4つに大別できます。

### ③ 課題解決のために

それでは、これら大きく4つの課題を解決するためにどのような手立てを考えればよいでしょうか。個々の課題について考えていきましょう。

#### 【教員の質向上のための研修について】

「教員の質向上」のために、様々なレベルでの研修が多く行われています。文部科学省では「英語教育推進リーダー研修」、地方自治体や学校独自でも様々なものが用意されています。しかし、こうした研修について批判的な私見を述べると、研修の対象者が偏ってしまい、全ての教員にその機会が与えられているのかに疑問が残ります。これを解決するためには、研修の母体をできるだけ小さな単位で行い、より個に応じた必要性のある研修を行う「オンデマンド研修」を提案します。また、英語力に

ついて、参加者個々の能力が多様であることを考えると、「学び方研修」を中心に据えることや、限られた時間中での有効な研修には「授業を通しての研修」をお勧めします。英語力同様、授業力も机上で学ぶのではなく「使いながら・授業をしながら学ぶ」ことが肝要です。ある学校では、1～4年生担当の先生も年に一度は5、6年生担当の先生方と一緒にチームティーチングをすることを課し、先生方の自信にもつながるなど成果を出しています。

### 【環境・教材整備について】

現在の小学校外国語活動では、『英語ノート』に始まり、『Hi, friends!』『Hi, friends! plus』など文部科学省が配付した補助教材が用意されています。ほとんどの小学校ではこうした教材をアレンジしながら有効に活用しているでしょう。このような共通の教材は、指導内容の共通化や目標への共通理解など利点は多いと思われますし、今後も文部科学省や出版社による教材開発に期待してよいかと思います。しかし、これからの教科化へ向けて考えておきたいことは、縦と横のつながりです。『英語ノート』や『Hi, friends!』を分析すると、そこには系統性があるようにみえて、実際は系統性が十分に示されていないかたといえます。また、「町の道案内」や「行きたい国を紹介しよう」「自分の一日」といった単元が児童の生活や将来と、また児童の他教科領域での学びとどのように関連付けられているのかには疑問が残ります。社会科では外国についてどのように扱っていてそれが「行きたい国を紹介する」と適切に関連しているのか、吟味する必要があります。また、子どもたちの発達の段階を考慮すると、町の建物の名前を知ることは必要かもしれませんが、現実的でない整然とした街の道案内は「学校案内」とする方がより現実的な課題として設定しやすいかもしれません。このように、縦と横の視点からこれまでの教材を批判的に振り返ってみることで、今後の教材の有効活用へつながっていくでしょう。

### 【評価に関して】

小学校外国語活動の評価には様々な方法が試みられてきました。振り返りカードや観察、ポートフォリオの作成などがそれにあたります。今後、教科になると、これに加えて英語の運用力を評価する必要性が出てくる可能性があります。「英語を使って何ができるのか」という視点に基づいて評価を行うこととなるでしょうが、その際にはパフォーマンス評価がすすめられています。実際に何らかのタスク(自己紹介をする、買い物をする等)を設定し、それが達成できたかどうかを評価するということです。この手法については既に多くの研究開発校や外国語活動でも利用されているものですが、私が提案しておきたいことは、「評価規準の設定」と「評価基準の明確化・共有」です。これはその他の評価方法についても共通の課題ですが、「評価規準」(現在は国立教育政策研究所から提案されているものを活用していることがほとんどですが)を設定したものの、「評価基準」が言葉で示されているだけで、評価者間で一貫していないケースが多くみられます。外国語活動の例で考えると「慣れ親しんでいる姿」とはどのようなものか、評価者によって異なっているというのが現実です。これを解決する方法として、授業内の児童の姿をビデオ記録しておき、それを授業後研修で評価しながら「基準」の具体的なベンチマークを作成していくという作業が必要です。正確に評価をするためにはこうした地道な活動も取り組んでみるとよいでしょう。

外国語活動では、児童の振り返りカードに過度に頼る例もみられますが、振り返りカードは信頼性・妥当性の問題もあるために、評価材の中心というよりは、児童自身の学習の可視化・言語化による学びの過程として捉えることの方が妥当ではないかと思います。

### 【小中連携・小小連携】

小中連携・小小連携の課題解決には、お互いの情報交換が大前提です。行政や管理職の協力を得て研修・授

業など同じ場をどれだけ共有できるかが成功への第一歩となるでしょう。そこからお互いの得意分野での能力発揮へつなげていくことが求められます。もちろん教育内容・方法の連携なども提案されていますが、まずは情報の共有とそれぞれの場での活躍が現実的な連携でしょう。諸外国では、学習指導要領上でつながっているのだから敢えてそれは考えていないという話も聞いたことがあります。一理あるかもしれませんが、最低限の情報共有は不可欠でしょう。

#### ④ おわりに:教科化に向けて

ここまで外国語活動の成果と課題をもとに、その解決の手がかりを提案してきましたが、教科化となると状況は大きく変わってくるのでしょうか。私見ではありますが、足場にあるものは共通で、これまで言語教育を考える際に私が一貫して思ってきたことは、今後小学校英語が教科となったときも変わらない普遍だと思います。それをここに挙げておきます。

- ① 言葉は文脈の中で使うことを通して学ぶ
- ② 授業には思考を含めること、知的楽しさの実現
- ③ 言いたいことを表現できる場の設定
- ④ リアリティのある活動の実現
- ⑤ 音声の保障と学び方の指導
- ⑥ 知識量を増やす学習から情報の活用力へ

言葉は文脈から切り離された時点で本来の意味を失ってしまいます。学習においても相手意識を含めた実際の文脈の中で使うことを通して学べるようにしていきたいと思います。またそこでは学習者には相手や場面に応じて思考を働かせたコミュニケーションをし、様々な情報を総合的に活用した理解・発信をさせるなどの活動を含めることが大切でしょう。学校という限られた練習の場ではなく、学校を超えた本当の生活や社会の場で英語を使う体験をさせることで、達成感や時には挫折

感を味わうことも次の学習への意欲づけにつながります。リアリティのある場を実現することで、言いたいことも膨らんでくるでしょうし、そこで必要な表現を与えてあげることが学習の効率も上げることにつながるでしょう。与えられたパーツを組み立てるプラモデル作成ではない自由な発想と創造力が今後の子どもたちの生きる力ともなっていくでしょう。そして、これまでの英語教育で十分でなかったことの大きな一つである、音声の保障及び学び方の指導です。現在の環境では「音」を振り返ることはできません。今後は携帯音声プレイヤーなどの活用を積極的に行い、必要なときに音声を振り返るなどの手立てをとることが非常に重要でしょう。児童が自律的・自立的に学ぶことを支えるための環境整備と学び方指導は今後も不可欠でしょう。

最後に、これからは「英語を使って何ができるか」が求められており、活用力が求められる時代だといえます。個々の語彙の意味を言えること、文法がわかることなどの知識量は場合によってはコンピュータなどの情報機器がとってかわることは近い将来予想されます。スマートフォンの音声認識や自動翻訳機などをみるとその進歩は目覚ましい限りです。これからの子どもたちは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」のバランスをとりながらも、特に「思考力・判断力・表現力等(知っていること・できることをどう使うか)」「人間性や学びに向かう力(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)」を中心に据えた学習の在り方を模索していく必要があると考えます。

#### 引用・参考文献

- ・文部科学省(2015)「平成26年度「小学校外国語活動実施状況調査」の結果について」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm)
- ・日本英語検定協会(2015)「小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査 総合編」  
[http://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/pdf/market/elementary\\_press\\_2612.pdf](http://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/market/elementary_press_2612.pdf)